

東京下町 柴又新聞

第25号

TOKYO DOWNTOWN
SHIBAMATA
PRESS
Vol.25

2014年(平成26年)3月5日 水曜日
(毎月5日・20日発行)

(株)講談社 アミューズメント出版部
〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21
☎03-3944-1294
編集・発行人:高附 嘉
©KODANSHA 2014 Printed in Japan
印刷:国書印刷(株)



昭和7年築とされる「銀座レトロギャラリーMUSEE」の建物。赤レンガ風の加彩タイルは当時の流行だった。昭和初期には1階に灯油を扱う会社があり、近隣住民はよく買いに来ていたそう。



貸しギャラリーに併設して、19世紀末ウィーン分離派によるインテリアも展示販売。



同ギャラリーを運営する「川崎ブランドデザイン」の代表取締役、川崎力宏さん。

**銀座の歴史を物語る
古き良き時代の建物が再生**
松坂屋銀座店が、88年の歴史に幕を下ろしました。跡地は大型複合施設となる予定ですが、時代を合せると、88年後もこの街は変わらぬままです。周囲を歩くと、13年6月に開廊した同ギャラリーの川崎力宏さんが、「昭和7年建築なんですね」と中に入る

「当初は14階建てのビルに建て替えるつもりでした。しかし、入居していた飲食店の看板類が外され、いざ引き渡しとなつた時に、建物のもつ魅力に気がついたんです。銀座の歴史を知るこの建物を壊すのがとても忍びなくなり、土壇場になつてこの洋館を残すことになりました」

時代のかけらを求め歩き続けると、重厚な外壁が味わい深い「銀座レトロギャラリーMUSEE」に目が留まりました。扉を開けて

「素敵な建物ですね」と中に入る

「13年6月に開廊した同ギャラリーの川崎力宏さんが、「昭和7年建築なんですね」と迎えてくれました。

「最初は14階建てのビルに建て替えるつもりでした。しかし、入居

着々と解体工事が進んでいる松坂屋銀座店を筆頭に、銀座から消えゆく古き建物たち。更地となつた場所には、2020年の東京五輪を見据えた新施設が続々と登場するようです。再開発の波が押し寄せるそんな銀座で、かろうじて守られている昭和の風景や味を探します。

銀座【その2】

昭和初期の銀座の名残

変わるもの、残るもの、復活するもの



店内は有田焼のシャンデリアなども見所。「浅利の漁師風」(780円)。



「ichi-jiyoji」外観。店内外ともに2階部分に、かつての日本らしい間取りや生活様式が見られる。

「壊すのは簡単ですが、昭和21年築の古民家が持つ味は作れるものではありません。この建物だけが持つ雰囲気を活かし、ビストロとして再生させています」と、店長の小島啓太郎さん。

店内を見渡すと、かつて民家であつたことを物語る梁や床の間などが健在。このようにお店が建物を再生することで、かつての銀座の姿がわずかながらでも確実に、残されていくのですね。

歴史あるバーが復活 残される昭和の味



旧店舗の面影が残る「バー TARU」の新店舗。「マティーニ」(1200円)はお店のルーツである、昭和9年創業のバー「機関車」譲りの味。

の1。でも、移築したカウンターなどを見て、「TARUは健在だね」と言ってくれるのは嬉しいものです」と2代目の赤羽穂さん。現在では3代目の赤羽力さんが創業時から変わらぬレシピでお酒を提供。この店ならではのキリッと辛いマティーニの味が、消えかけてゆく古き良き銀座を思い起こさせてくれるに違ひありません。



解体工事中の松坂屋銀座店。跡地に平成28年を目途に新複合施設が。



銀座・昭和初期の名残 MAP



柴